落語における笑いの要因の研究 II

○増山英太郎(東京^{都立}大学)・勝見正彦(株式会社市進)

Study on factors of laughing in Rakugo II
Eitaro Masuyama (Tokyo Metropolitan Univ.) &
Masahiko Katsumi (Co. Ichishin)

実験概要:桂米朝の語る落語の寝目について実験を行ったわけであるが、ここでは特に、第3寝目「饅頭こわい」に話を絞って説明をしていく。被験者がテープを聴く前に読んだあらすじが図3に示してある。テープで聴く最後の3分の間には、笑い声をあげている箇所が6箇所あったが、それぞれについて被験者はその「おかしさ」について6段階で評定した(※)。被験者4人の評定平均値^①が、話が進むにつれてどう推移するかを図示したのが図4である。名々の箇所がなぜおかしいのか、被験者にそれらの該当度合いを6段階で評定してもらった(※)。4人の評定平均値^②が3以上だった項目を図4の下半分に記してある。

実験結果と考察:「饅頭がこわい」と言って寝こんでしまった男の家に饅頭が投げこまれたところからテープが始まる。ところがこの男(図ではせりふの所にAと記入)が「饅頭がこわい」と言ったのは、そう言えばきつと他の連中が饅頭を買って持ってくるだろうという計略で、実はこの男は甘いものが好物なのである。そのせりふが笑いを起こす1番目の箇所^③である。この時点までの話が、この一言で大きく逆転する、この落語の大切なポイントである。従ってこの箇所の「おかしさ」の評定平均値^①は高く被験者間の差も小さい(信頼区間が狭い)。その後、この男は投げこまれた饅頭を一つ一つ講釈をつづながら食べていく。ここでは大きな展開は無いが、聴

衆が飽きないように少し笑わせる部分が入れている。それが2番目の箇所^④で、菓子メーカーへの寝者(作者)の皮肉がこめられている。これを皮肉ととるかどうかが「おかしさ」評価も差が出てくる(信頼区間はない)。そのうち他の連中(饅頭を投げこんだ連中でせりふの所にはAと記入)が少しずつ事態のおかしいことに気づきはじめる。これが3番目の箇所^⑤。聴衆は、これらの連中より少し前にこの事態を知っているので、一種の優越感を感じるのである。この優越感^⑥は、次の4番目の箇所^⑦で増幅される。連中が事態を知って「アッアッ」とまるでカラスが鳴いているような声を出すあわてぶりがそれである。図のように「比喩」「反復表現」が項目としてあげられているが、恐らく潜在意識として優越感があるだろう。計略がばれて居直る様子の「おかしさ」が5番目の箇所^⑧である。最後のオチ^⑨では、「本当にこわい物はいったい何なんだ」と連中がまじめにきくのに対し、又も図々しく「熱いお茶が怖い」(饅頭ばかり食べていたからお茶が飲しくなる)という返答が対照的なこと、それまでもあった図々しさ(物欲的態度)が輪をかけている事で「おかしさ」は最高潮になるのである。

仲間が寄って話しているうちに「こわいもの」の話になる。一人の男は「饅頭がこわい」と言う。「饅頭と聞いただけでふるえがきたからどう帰って寝ます」と帰ってしまう。他の男達は「これはおもしろい。あいつ気にくわない奴だから。」とわざわざ饅頭をいろいろ買いそろえ、彼の家に投げ入れる。

図3 「饅頭こわい」のあらすじ

※ 同じ理由が2度目に出てきたもの

図4. 第3項目「饅頭こわい」における「おかしさ」評定平均値の推移